ポストコロナにおける都市祭礼の在り方に関する一考察

荒川裕紀*

Challenges faced when organizing Urban Festivals in the Post-COVID-19 Society

Hironori ARAKAWA

ABSTRACT

This report describes the challenges faced when organizing the “Nishinomiya Matsuri”, a festival held during the spread of the infectious diseases caused by COVID-19. First, it is detailed described the background of the annual festival “Nishinomiya Matsuri”. Furthermore, it is reported and discussed the contents of this year’s event and reasons for its implementation. Based on the author’s participation and observation, together with information acquired from surveys and interviews, in the dissertation, the author concluded that it is desirable to continue the festival during difficult times, even if the festival needs to be adapted. The “Nishinomiya Matsuri” festival is an excellent example of how to deal with grand-scale urban festivals during the “With-COVID-19” society and the "Post-COVID-19" society in the future.

KEY WORDS: Post-COVID-19 Society, Festival, Urban festival, Sustainable Relations

１．はじめに

当論考は、このコロナウィルスによる感染症の拡大の中、地域祭礼を催行・（結果的に）継続した祭礼について、その成立とコロナ以前の催行形態について詳述した後、今年度の催行の実際とその実施理由について報告・考察を行うものである。

今回取り上げた祭礼は、兵庫県西宮市の西宮神社で催行された「西宮まつり」である。これは神社内の祭礼としては一番重要とされる「例祭」を中心として従来は 9 月 21 日から 23 日の 3 日間を通じて催行される祭りである。この祭礼の設立の経緯や特徴を述べた上で、今年度に関してどのような催行形態をとったのか、実際に参加調査した記録を祭礼参加者へのインタビューとともに提示したい。

西宮神社の祭神の 1 つは「えびす（蛭子大神）」であり、一年を通じて多くの参詣客が福を求めて参詣する最大の参詣行事は、「十日戎」である。その中でも一番の行事とも言える「福男選び」は、諸媒体での報道によって阪神間のみならず全国的に認知されている神事であるが、諸事情による自粛ムードよって、この不催行が西宮神社によって考慮された年もあった。例えば、今回のコロナ禍とは性質を異にするが、1989（昭和 64・平成元）年の正月から十日戎にかけての時期は、まさに「自粛期」であった。しかし、この時の十日戎は、形は多少変化させながらも催行したのである。具体的になぜ、どのように催行したのかを、当時の新聞資料を提示した上で考察する。

今回のコロナ禍は主に衛生的な理由、1989（昭和 64・平成元）年の場合は政治的・社会的な理由という違いがあるが、西宮神社の祭礼実施の側面で考えた際、どちらも「中止するのではなく、催行し、結果としては継続した」という部分では共通する面を持つ。えびす信仰という特殊性があるかもしれないが、この 2 つの祭礼が継続できた理由や、継続・実施した際の意義について、他の地域の祭礼・参詣などにも共通する普

*一般科目

遍的なものが見いだせないかとの思いにも至った。今年度、新たに聞き取り調査を行った、西宮神社同様、えびす信仰に関係深い、明石市内の二神社（稲爪神社・岩屋神社）での調査結果も報告・考察し、今後のポストコロナ社会における祭礼の形を模索してみたい。

2. コロナ禍の中での祭礼

2019 年末より新型コロナウイルス（SARS コロナウイルス 2）が世界中で感染症（COVID-19）を引き起こし、2020 年 10 月現在も日本を含めた世界各地で感染が拡大している。世界中で治療法の確立を急ぐと同時に、感染症の予防のために様々な予防対策が取られることとなった。日本においては、2020 年 3 月に総理大臣官邸・厚生労働省が、「3 密」の標語を提唱。感染拡大を出来るだけ防ぐため、密閉、密集、密接を避けるよう日本全国に要請することとなった。

これを受けて、明石高専においても授業を含めた対面でのやり取りを極力減少させる方策が検討され、4 月からの対面授業を中止し、5 月よりオンラインによる授業の実施を開始した。カリキュラム上、実験や実習が多いこともあり、7 月より対面授業が実施されたが、「手洗いの徹底・マスクの着用・換気・極力密集を避ける」などといった感染症対策に十分配慮した状態での実施となっている。

日本国内全体に目を向けると、移動の自主的な制限が広範囲で実施され、公共交通機関の乗車率の低下が顕著となり、交通機関によっては減便などの事態が起こっている。同時に外食産業や観光産業も利用率の低下にあえぐこととなり、政府としては、「Go To キャンペーン」と銘打って新型コロナウィルス感染症緊急経済対策を実施することとなった。旅行業活性化のための「Go To トラベル」、外食業活性化のための「Go To イート」に引き続き、2020 年 10 月からはイベント・エンターテイメント活性化のための「Go To イベント」、地域経済活性化のための「Go To 商店街」も計画されている。10 月からは「Go To トラベル」においては東京都（地域・住民）も対象にしたこともあって、感染拡大前の利用者数には依然届かないものの、さらなる増加が見込まれ、実際に各観光地は多くの人で賑いが戻ったとの報道もなされている。

しかし、密を生み出してしまう人が多く集まる形態のイベントなどを筆頭に、完全に感染拡大前の社会に戻ることは難しいと思われる。本報告者が調査領域とする地域祭礼に関しては、2020 年初頭以降の感染拡大に伴い、その多くが中止・延期を余儀なくされている。例えば、日本の代表的な祭礼として挙げられる京都の祇園祭、博多の山笠などは中止、浅草の三社祭は延期を余儀なくされている。本報告者が調査を実施した、北九州市の「小倉祇園太鼓」[1]も同様に、今年度に関しては中止された。

当論考においては、上記の「中止・延期」ではなく、形態を変化させながらも「催行」した祭礼、「西宮まつり」について取り上げる。具体的には、例年 3 日間催行するところ、9 月 22 日の 1 日に短縮して催行された。当祭礼については、設立（厳密には再興）前後より本報告者が調査を開始し、約 20 年間研究対象としている。研究対象としてだけでなく、大学・高専と地域社会とを連携させる実践機会として、能動的に関係してきた。

これまで、社会学・民俗学・文化人類学の諸分野で、祭礼が地域社会の紐帯を繋ぎ止める役割を担っていることは多くの文献で述べられ、私自身も定性・定量調査にて明らかにしてきた。地域社会にとって、祭礼は欠かせないものであることは確かである。この未曽有のコロナ禍の中、地域住民の紐帯を強めることは必須であろう。しかし、全国的にはやむを得ず中止・延期されているところが多い。夏を過ぎた 9 月、コロナ禍が少し落ち着いてきたこともあり、三社祭のように延期していた祭礼催行の動きもある。まさに、現在進行形で感染のリスクを考えた上でも祭礼実施に意義があるとの判断が下されている途上にある。

いち早く阪神間において、比較的大きな規模で催行できた、「西宮まつり」の事例は、ポストコロナ・ウィズコロナにおける祭礼のふさわしい実施形態を考える上でも、大いに参考になるのではと考える。次項で、当祭礼の催行形態・設立の経緯・祭礼の特徴などを述べ、次々項にて今年度の催行の実際について報告する。

3. 西宮まつりの概要（催行形態・設立の経緯・特徴）

西宮まつりは、例年 9 月 21 日から 23 日までの 3 日間催行される。22 日に西宮神社でのもっとも大切な祭りである「例祭」が開催され、それを挟む形で、21 日に「宵宮祭」、23 日に「渡御祭」が催行される。

詳細な日程としては、21 日 17 時に「宵宮祭」が神職によって斎行されたのち、奉納の演芸会や抽選会が実施される。22 日は午前 10 時に例祭の後に稚児行列や、氏子区域から約 30 基の「こども樽みこし」が市内の中央商店街などを練り歩く。23 日は「渡御祭」が催行される。午前に氏子内の当番地域（現在では小学校区が基になっている）を神輿と時代行列が巡行し、昼からは新西宮浜ヨットハーバーに移動し 7 隻ほどの船団に祭礼関係者が乗り込み、西宮浜を船で巡行し、御前浜沖にて海上安全を祈願する「かざまつり」が神職

にて斎行される。1 隻のみが、兵庫の和田岬まで航海し、えびす様が生まれた故郷を巡る「産宮参り」を行う。10 年に一度、全船が西宮港を出て、和田岬まで訪問し、祭礼関係全員で産宮参り（図 1）をする。この 3 日間とも、氏子青年会である「若戎会」は西宮市中や神戸和田岬周辺を巡行する。

図 1：全奉仕者による「産宮参り」（2009 年）

海上渡御は、昔、鳴尾（現西宮市東部）漁師が現在の神戸市兵庫区の和田岬沖で漁をしていたところ、えびす様の御神像が網にかかり、鳴尾に持ち帰ってお祀りし、それを西宮神社の地に連れて行ったとする、西宮神社の御鎮座伝説に由来するものである。このえびす様が生まれた場所に戻すという、和田岬への神幸（船渡御）は中世では西宮神社におけるもっとも賑やかな祭りとして受け継がれてきたが、織田信長による社領の没収によって廃絶してしまった。その後は祭典のみが奉仕されていたが、1954（昭和 29）年に神輿行列による西宮市内巡行（陸渡御）が再興。しかし 1995（平成 7）年の阪神淡路大震災以降、中断。2000（平成 12）年に復興の目途が立ち、約 400 年ぶりに海上船渡御（図 2）が実施される運びとなったのである。

図 2：海上船渡御（2017 年）

特徴としては、多くの地域祭礼での催行主体である地域自治会や氏子組織、氏子青年会のみならず、近隣の大学（現在は明石高専を含む）などからの人的な協力が盛んなことである。特に、2000（平成 12）年の海上渡御再興の辺りより顕著になった。これは、祭礼自体が巨大化したことによって、人手が必要となったことも挙げられるが、当時祇園祭などの祭礼研究者であった米山俊直が、近隣である大手前大学の学長に就任したことも大きい。米山は、1997 年に学長就任後、1998 年 4 月に歴史学・建築学・文学・文化人類学・地理学の諸分野からの研究者・学生を集め「えびす信仰研究会」を発足させ、学術的な研究を始めていた。そのこともあり、西宮神社との繋がりも強化され、大手前大学を皮切りに、夙川短期大学（当時）、神戸女学院大学、武庫川女子大学の学生や教職員等が、西宮まつりを含めた西宮神社の祭礼に携わる[2]こととなった。

2000 年の再興当時、大学院生だった本報告者は、当初は映像記録者として、新聞社やテレビ局の報道陣と共に別に仕立てられた取材船に乗りながら調査を行ったが、年を経る中で祭礼関係者との関係も深まり、神輿の担ぎ手にも誘われて、数年体験することにも繋がった。私個人の関係から、兵庫県内の大学生（関西学院大学・甲南大学・神戸大学など）からも多数参加することにも繋がっていた。本報告者が高専教員となり、「十日戎」の実践を伴った研究を本格的に始め出した 2010 年以降からは、志望する高専学生も祭礼の奉仕[3]に加わることとなった。（図 3・4）

図 3：西宮まつりにおける高専学生・教員（2019 年）

図 4：学生・教員が賛助する陸渡御（2018 年）

このように、本来ならば地縁のみに基づいて催行されることの多い祭礼が、立地や研究者までもが取り込まれたという特殊性によって、神職、地縁（自治会・氏子青年会など）、社縁（本えびす講社・神輿奉賛講社・開門神事講社など）・学校縁（諸大学・高専）、さらには西宮国際交流協会の参加で在留の外国人の縁まで存在する。まさに、様々な縁の人々が一同に会する、独特な祭礼として発展を遂げてきたのである。

4. コロナ禍での西宮まつり実施

コロナ禍に見舞われた 2020 年、この西宮まつりに関しても実施主体である西宮神社を中心に開催の是非が論議されたが、結果としては「規模を縮小した上での催行」を選択した。

具体的には、開催日程を 3 日から 1 日に縮小し、宵宮祭やだんじり巡行は中止されることとなった。例祭や渡御祭も、神職と地域自治会、地域住民が多数を占める神輿奉賛講社を主とした祭典奉仕者のみが参加する形となった。

22 日午前 10 時に西宮神社にとって年間祭礼の中で一番重要とされる例祭を斎行し、午後 1 時半に発輿祭、還御祭が本殿にて実施された後、境内に用意されたトラックに神輿を載せ、祭礼奉仕者はバスに乗って、新西宮浜ヨットハーバーに向かった。そこで、御座船等に乗り換え、午後 2 時 50 分よりヨットハーバーを出港し、海上船渡御となった。海上渡御のルートとしては例年と変化はなかったが、例年ならば午前に発輿祭、還御祭が本殿にて実施され、その後時代行列と神輿が氏子区域（各当番地域：現在の学校区を基準とする）を巡行した後に海上渡御となっていた。陸渡御を廃止することにより、人との接触を極力少なくしたことが窺えた。本殿から境内への移動の際の行列も、各自が距離を取ることに注意を払い（図 5）、神輿奉仕者全員には祭礼用に特別誂えたマスクの着用が義務付けられていた。（図 6）

図 5：時代装束での神幸も距離を空けて（2020 年）

図 6：マスクを着用する神輿奉賛講社講員（2020 年）

神輿も例年なら担ぎ手は約 60 人であるが、その半分の 30 名、時代装束での神幸では、学生たちの賛助は無くなり、八乙女・朱傘などの人員が削減された。神社の発表では、渡御神幸祭の参加者が昨年度 282 名以上だったものが、63 名に削減された。海上渡御では、昨年は見学者も出るため 7 隻の船団が計画されていた。船団の詳細定員は、警戒船①（定員 20 名）、御座船（同 50 名）、警戒船②（同 10 名）、供奉船①（同 50 名）、供奉船②（同 50 名）、見学船①（同 200 名）、見学船②（同 100 名）であり、最大で 480 名の定員であった。今年度は、見学船が無くなり、警戒船①（同 5 名）、先祓船（同 50 名）、御座船（同 50 名）、供奉者船（同 50 名）、警戒船②（同 5 名）の 5 隻、産宮参りとして神戸和田岬まで航行する 1 隻（同 13 名）も含めて 6 隻、定員の計 163 名と数字の上でも激減していた。実際に本報告者は御座船に乗ったが、距離を取って各自が着席する形での催行（図 7）であり、渡御祭参加者に数名加わる程度であった。

図 7：距離を取って着席する御座船（2020 年）

例年かざまつりは八乙女が斎行（図 8）するのだが、

今回は別の祭礼奉仕者が斎行（図 9）する形となった。

図 8：八乙女によるかざまつりの斎行（2017 年）

図 9：祭礼奉仕者によるかざまつりの斎行（2020 年）

このかざまつりの後、近年は戎舞が披露される。戎舞は西宮神社が発祥とされる人形浄瑠璃、文楽の起源ともいえる人形操りであった傀儡（くぐつ）師の舞であり、瀬戸内を越え、淡路島や徳島県に広がった民俗芸能である。昨年までは南あわじ市南淡中学校の郷土芸能部 OB･OG らによるグループの「淡路人形芸舞組」（図 10）と西宮にある「人形芝居えびす座」の競演が行われてきた。今年度に関しては、人形芝居えびす座のみの公演であったが、座長の武地秀実氏が吉兆を呼ぶ人形舞に「疫病も退散」とのメッセージも織り込みながら見事に演じきられた（図 11）。

図 10：淡路人形芸舞組による戎舞（2018 年）

図 11：武地氏による御前浜沖での戎舞（2020 年）

この後、ヨットハーバーに戻り、午後 5 時過ぎにヨットハーバーを出発し、午後 5 時 40 分ごろに還御祭を執り行い、西宮まつりは無事終了した。例年ならばこの終わりに直会（なおらい・なおらえ）があるが、今年度は密を避けるために中止となった。西宮まつりの直会は、先述の様々な縁で集まった人々が一堂に会す大きなものであり、近年は結婚式場として使用される西宮神社会館の会場のみならず、廊下にまで座席を配しても入りきらないほどの盛況であった。（図 12）

図 12：その年の福男も参加しての直会（2017 年）

まさに、その場で様々な縁の交歓が実施されていた訳だが、神社関係者はもとより今回参加した祭礼奉仕者へのインタビューでも「今年は致し方ない」との意見がほとんどであった。このように、縮小や一部行事の中止はあったものの、神社がまずは実施したかった例祭を実施することが出来、海上船渡御も縮小ながら催行出来たことは、特筆に値する。参加者も祭り自体は催行を継続して欲しかったという意見が殆どで、この自粛時に規模を縮小してでも祭礼の催行が出来たことへの満足感が見受けられた。地域においては、地縁をはじめとした紐帯を確認し、それを強化する上において、やはり祭礼が必要であることを強く感じた。形は変えども、祭礼を継続することが必要であろう。

5. 1989 年の十日戎

西宮神社の諸祭礼の中で、この「継続」という文脈で、結果的に大成功に導いたのは、昭和から平成の変わり目の「自粛時」による十日戎の催行継続と、最も注目される神事へと変容した「福男選び」を決行したことではないかと考える。実際、昭和期には、「開門神事福男選び」の語句を見ることは、新聞紙上においては本報告者が確認した限り無い。もっぱら、「福男競走」「開門競争」「一番詣り」などの語で呼称されていたのみである。つまり、この昭和と平成を境目として、あの門開けの競争を「開門神事福男選び」と呼称することが普及したとも考えられるからである。

1989（平成元）年 1 月 10 日は昭和天皇崩御のわずか 3 日後であり、神社関係者に当時の様子をインタビューしたが、実際、十日戎自体の自粛や取り止めまで検討されていたようである。当時の新聞を取り上げながら、この自粛ムードを当時の西宮神社が如何に乗り切ったのかについて述べてみたい。まず、1989（平成元）年 1 月 8 日付けの朝日新聞阪神版を紹介したい。

〈初もうで〉　西宮市社家町の西宮　　神社では元日に三十四万六千人、三が日で計約五十二万二千人（同神社調べ）が初もうでに訪れ、予想の四十五万人を一六％も上回った。総務担当の西井璋（あきら）さんは「えびす様は商売繁盛、家内安全、大漁祈願と身の回りの生活に密着した神様ですから、自粛ムードの影響を受けなかったのではないでしょうか」という。平均株価が三万円を超える好景気に「今年もたのんます」と手を合わせる参拝客でごった返した。

三が日は昭和天皇崩御の前であるが、軒並み自粛ムードが漂っていた時期ではある。しかし、実際には神社の予想を超える人々が初詣に訪れていたという事実は興味深い。1 月 7 日の昭和天皇の崩御後、行政を中心に服喪の対応に苦慮しているのを筆頭に、コンサートの中止、阪神パーク・宝塚ファミリーランドといった遊園地でも、大型遊具の営業は取りやめるなど自粛ムードが漂っている。だからこそ、この西宮神社の「初もうではいつも以上の参詣客でした」というコメントは異彩を放っている。そして、1 月 9 日の朝日新聞阪神版には、「商売繁盛を頼んまっせ　きょう宵えびす」と題して、次の記事が掲載されている。

十日は午前六時の大太鼓を合図に開門する。開門時には初参りの縁起をかついで参拝者が一斉に本殿へ走り、到着順に一番福、二番福、三番福の福男三人を決める神事があり、三人には御神像や景品が授けられる。服喪期間中のため、お神楽は中止するが、ほかは例年通りで「商売繁盛ササもってこい」のにぎわいとなりそうだ

軒並み自粛ムードの中、「ほとんどいつもと変わらない十日戎」を選択した西宮神社の姿勢が興味深い。朝日新聞においては、福男競争を「神事」とこの時点で初めて呼称している。朝日、読売、神戸、毎日の中でこの行事を「神事」と呼び始めたのは神戸新聞を除くと他は全てこの 1989 年以降である。神戸新聞は、1986 年 1 月 10 日夕刊では、「恒例の『福男一番』」、1987 年 1 月 10 日夕刊には「本えびす参拝競争」とあり、忌籠りの「神事」の後に行われると明記されている。そして 1988 年 1 月 11 日朝刊になってはじめて、「今年も「福男」を選ぶ神事から」と表現されている。忌籠神事がこの競争にまでかかる形で用いられた。1989 年 1 月 10 日の朝日新聞と神戸新聞の記事を提示する。

神戸新聞

平成元年一番福だ西宮神社“えびす顔”の三百人競う　本えびすの十日、西宮神社（西宮市社家町）で恒例の開門の神事「福男選び」が行われた。福男三人による鏡開きや参拝者への振る舞いは中止されたものの、例年通り午前六時の開門と同時に、平成元年の一番福を目指して三百人が勢いよく境内を駆け抜けた。

朝日新聞

西宮市社家町の西宮神社では、午前六時に開門。約三百人の参拝客らが境内に入った。本殿までの約二百メートルを福男を決める開門神事では（中略）本殿前で福男が行う鏡開きとふるまい酒は中止された。

朝日新聞は「選び」の語を使っておらず、新聞上での初出は 1993（平成 5）年（1 月 11 日朝刊阪神版）である。しかしこの 1989（平成元）年のどちらの記事にも「神事」として載っている所に、語の創出が窺える。これは、毎日新聞（1 月 11 日朝刊阪神北西版）、読売新聞（1 月 11 日朝刊阪神版）でも同じであった。この両紙に関しては、例えば読売新聞では「参詣一番乗りを競い一番福をあてる神事「福男選び」」としており、前年までなかった「神事」「選び」という言葉を組み込んでいる。1989（平成元）年 1 月 10 日読売新聞朝刊

阪神版では、その創出と関連して以下の記事があった。

例年通り大祭神楽は中止　宵えびすの西宮市社家町、西宮神社では九日、天皇崩御の影響で参拝者の出足は鈍かったが、午後になって平成元年の福を求める人たちが詰めかけ、賑わいを取り戻した。神社側では「神社大祭」は神事にあたるとして例年通り開催。ただ参拝者の求めに応じて行う神楽は中止し、境内や神社周辺の露店には、派手な客の呼び込みを控えるように申し入れた。午前中は、毎年、「一番福」を求めて開門の午前六時前から訪れる和歌山県白浜町の堅田漁協の一行が喪に服して参拝を中止するなど、四万平方メートルの広大な境内に人影もまばら。しかし、子供たちが始業式を終えて学校から帰宅した午後からは、親子連れが増えるなど活気づいた。宝塚市内の喫茶店主（四二）は「新しい時代の商売繁盛をえべっさんにお願いしましたわ」とにっこり。

ここから読み取れるのは、服喪を行う団体もあるが、従来と変わらず参拝に訪れる多くの人々の姿である。そして最も注目すべき点は、「神社大祭は神事」であるために催行しようとした神社の方針ではないだろうか。先述の通り、「えびす様は商売繁盛、家内安全、大漁祈願と身の回りの生活に密着した神様」であり、神社にとってはその一番の祭事である十日戎の開催は必要だと考えたのではないか。「信仰・神事」の側面を前面に押し出すことによって、自粛ムード一色の中での敢行を可能としたのではないだろうか。だからこそ、同じように催行を決めた福男競争が「開門（の）神事」という呼称へと変化したのだといえる。先述の 1988 年の神戸新聞の記事は、忌籠神事のあとの競争までを神事と捉え報道しているのが興味深いが、この神事の拡大解釈を、翌年に神社が自粛ムード打開のために意識的に行ったともいえる。

ちなみに、平成元（1989）年 1 月 10 日神戸新聞夕刊には大阪の今宮戎神社では風物詩の宝恵かごを自粛した上での本えびす斎行となってしまったことが記されている。便宜上作り出された言葉であったかも知れないが、その後新聞紙上では急速にこの神事という語で定着をしていったことは、自粛時にも関わらず、祭礼を継続したからこそ得られた実であると考えられる。

現在、西宮神社では年明けの十日戎、また開門神事福男選び開催に関する是非が話し合われている。10 月現在のところ、諸対策を取った上で開門神事を含めて開催する意向であることである。もちろん、感染症ということもあり、感染拡大の際には中止となることも考えられるが、「参詣に来る人々を阻むことはできない」という庶民の信仰対象を途絶えさせてはならないという側面も感じられる。

6. 稲爪神社・岩屋神社での聞き取り調査

（1）岩屋神社の十日戎

もともと明石城主の産土神として、歴代藩主も参詣した由緒ある神社である。淡路岩屋より成務天皇 13（143）年遷座したとされる。祭神は伊弉諾命・伊弉冊命・大日霎命（天照大神）・月読命・素戔嗚命・蛭子命であり、7 月に行われるおしゃたか舟神事でも有名だが、参詣客は十日戎が最も多いとのことである。

戦前より十日戎は実施し、参詣客で賑わっていた。しかし空襲で全焼し、社殿の本格的な再建や社務所の新築に時間がかかったが、昭和 22（1947）年ごろより十日戎は復活。福引などが有名となり、参詣客が再び増加した。特色のある行事としては、「ご縁（五円）探し」、「開運招福小鳥居くぐり抜け」などがある。「社殿の壁を打ち鳴らす」[4]、「マグロの奉納」など、他神社の十日戎の風習も採り入れている（図 13）。

図 13：打ち鳴らす壁の手前に小鳥居を設置（岩屋神社）

十日戎の 3 日を「宵戎祭（9 日）」「十日戎祭（10 日）」「残り福祭（11 日）」と呼称している。近年十日戎の参詣客が増加しており、だからこそ様々なイベントも企画しているとのことである。コロナ禍で代表的なおしゃたか舟神事等、祭礼は中止になったものも多いが、十日戎自体は「参詣」の要素が強く、「来た人を拒むことはできない」と考えているとのことである。状況によって変化するかもしれないが、対策は行ったうえで、十日戎自体は継続を行いたいとの話であった。

（2）稲爪神社

推古天皇期に創建。祭神は大山祇大神・面足大神・惶根大神・伊和都比賣大神・宇留大神であり、摂社として「稲爪濱恵比須神社」を置いており、祭神は事代主神である。字の通り、浜に在った「えびす社」を昭和 29（1954）年に稲爪神社境内に遷座したのが始まり

である。遷座後は摂社の前にやぐらを組んで十日戎に備えていたが、平成初期に参詣客の増加もあり、拝殿を創建した（図 14）。

図 14：稲爪神社拝殿左隣にある稲爪濱恵比須神社

例祭・初詣もあるが、十日戎の参詣客が多い。えびす・大黒の巡行を魚の棚にて実施。十日戎の 3 日を、「宵宮（9 日）」「本宮（10 日）」「後宮（11 日）」と呼称。稲爪神社も岩屋神社同様に、十日戎に関しては「状況が悪くならない限り、距離を取るなりして対策を取った上で」催行したいとのことであった。

西宮神社の十日戎、その中でも忌籠などの祭礼的な意味が強い開門神事福男選びに比べ、この二社の十日戎は参詣の側面が強いために前記の判断が出たものと思うが、同じ十日戎を斎行する神社がこのような「継続」という判断があることは、西宮神社にとっても大きな後押しになるのではないか。

7. 考察

今回のコロナ禍で全世界の祭礼が中止、延期される中で縮小しながらも例祭を含めた「西宮まつり」を催行したことは、当事者にとって大きな決断であったが、ポストコロナ・ウィズコロナを考慮した祭礼を考える上で大きな前進になったと考える。感染拡大がある程度抑えられたために催行できたともいえるが、リスクを冒してでも催行する必要があるといる強い信念と祭礼関係者の強い要望が今回の結果につながった。

生物学的な感染リスクもさることながら、社会的な自粛ムードの中での催行である。自粛という文脈で見た際、この動きは 1989 年の十日戎と関係するところが多い。その際には西宮神社は「福男競争」を「開門神事」という語に結果的に置き換える形で、神事性を押し出すことによって、祭礼の継続を可能とした。今回の「西宮まつり」の継続も、縮小しながらも「祀る」という神事性の部分を極力残すことで成功させたと言えるのではないか。海上船渡御における戎舞においても病魔の退散の祈願を入れることによって、結果的に対コロナという新たなメッセージ性を組み込むことにも繋がった。

このように集客のみを前提としたイベントではなく、「祀る」祭礼という部分を出すことは、宗教系の祭礼の場合可能であり、西宮神社においては過去にその経験もあったということは大きいといえよう。ある程度の感染拡大の収束が見えてきた際には、この「祀る」対象のある祭礼に関しては、早期の再興は可能であり、祭礼の持つ地域や様々な縁を繋ぐ機能が再機能していくのではないかと考える。

8. 謝辞・課題

当論考も含めた本報告者の研究は、今年度特別に創設された兵庫県の「ポストコロナ社会の具体化に向けた調査検討費補助事業」の対象として採択された。この場を借りて、厚く御礼申し上げたい。

具体的には「祭礼実施者や住民を対象に、感染拡大期における祭礼へのニーズ等を調査し、予防対策を十分にとった新たな祭礼の形を提案するもの」である。今回の論文は現況報告が主であるが、当論考などに基づき、新たな形での祭礼の提案に寄与していきたい。

喫緊の課題は、来年 1 月 10 日に催行される「西宮神社十日戎開門神事福男選び」である。本報告者は、これまでの研究と祭礼の実践から、2009 年より「開門神事講社」の理事に就任している。研究と実践を同時に行える立場だからこその提言が実施出来れば、幸甚である。今年度の西宮まつりに関しては、先述の通り、地域自治会を主とした祭礼関係者のみの催行であったが、本報告者も調査を目的として祭礼に特別に同行させていただけたことによって貴重な調査機会となった。

岩屋神社・稲爪神社にも、インタビュー調査の際に大変にはお世話になった。今回の調査によって明石市は、えびす信仰の篤い地域であることを改めて実感した。この二神社、さら浜に点在するえびすを祀った多くの神社・祠を中心に繰り広がられる、祭礼や参詣についての調査を本格的に実施したいと考えている。どのように人はポストコロナ・ウィズコロナであっても祭礼と関わり続けるのか。実践を伴った調査をこれからも継続していく所存である。

参考文献・註

1) 北九州市文化財調査報告書第 158 集「小倉祇園太鼓」北九州市教育委員会　2018 年 10 月

2) 一時は、大学関係者の船も多く随伴する程であった。

3) 現在では学生プロジェクトとして、開門神事を含め、1 年中の祭礼の奉仕を地域連携の形で実施している。

4) これはえびす神の耳が遠いことに起因しているとされ、大阪の今宮戎神社の壁叩きや、起こすために尻を捻ったことが始まりとされる西宮の「おこしや祭り」等が有名である。